

# 親鸞聖人750回大遠忌

親鸞聖人七百五十回大遠忌をお迎えするにあたり

(あか まつ てつ しん)  
赤 松 徹 眞

二〇一二（平成二十四）年一月十六日は親鸞聖人七百五十回大遠忌<sup>だいおんき</sup>にあたり、二〇一一（平成二十三）年四月から法要が勤まる。すでに四年前の二〇〇五（平成十七）年一月九日には、即如ご門主から「親鸞聖人七百五十回大遠忌についての消息<sup>しやうそく</sup>」が發布されており、去る四月二日には、十年を要した御影堂の大修復工事が完遂<sup>かんすい</sup>して、本願寺御影堂平成大修復完成奉告法要が勤まったことは周知の通りである。

私たちが五十年ごとに迎える親鸞聖人の大遠忌は、くしくも大きな歴史のうねりに直面しながら勤めてきたといえる。五十年前の七百回大遠忌は一九六一（昭和三十六）年に勤まったが、まさに「所得倍増」の経済成長へ大きく動き始め、長きにわたって伝統化してきた地域の急変をともなう新たな産業都市社会の誕生、つまり宗門の地域基盤<sup>しやうもん</sup>の変化にともなう門信徒の都市への大移動という事態が進行していた。第二十三代勝如<sup>しょうにょ</sup>宗主は、現実の方向性を深く認識され、宗門・寺院や僧侶・門信徒のありようの見直しと浄土真宗のみ教えの興隆という課題をもって門信徒会運動を提唱されたのであった。

その後、日本社会の変貌<sup>いじり</sup>は著しく、一九八〇年代には国民総生産世界第二位の「経済大国」に発展したが、九十年代のはじめには土地投機を象徴とするバブル経済の崩壊に行き着くこととなった。しかし大量消費に欲望を組織化された「幸福感」や「自己の思いの通りになる」人生観は根本的に見直されることなく、市場原理にゆだねた規制緩和<sup>かんわ</sup>の「改革」による競争激化は「勝ち組」「負け組」などという単純な振り分けと格差を生み出した。雇用をめぐっても正規社員と非正規社員、派遣従業員、期間契約<sup>しよくたく</sup>の嘱託、アルバイトなどが増加して、多くの人びとが安心し、信頼を寄せ合う人や家族・地域が揺らぎ、不安感を社会的に増幅した。欲望をたくみに組織した「幸福感」や「自己の思い通りになる」人生観に培われた人びとは、他方では偽装するあまたの「新宗教」「啓発セミナー」などへの関心を高めた。

今、私たちを取りまく世界は大きく揺れ動き、未曾有<sup>みぞう</sup>の転換期にある。二〇〇八年九月十五日のアメリカの大手証券会社リーマン・ブラザーズの破綻<sup>はたん</sup>を発端とする金融恐慌により、「外需依存型の経済成長」を基調とした日本では株価が下落し、投資も貿易も消費も急激に縮小している。また、非正規社員の雇い止めや解雇、派遣切り、失業者や生活保護請求者の急増という事態に直面している。これらは、規制緩和による「改革」や投資ファンドなどによる利益効率を優先してきたことの行き着いたところともいえよう。

私たちは、宗祖の七百五十回大遠忌をお迎えするにあたり、働いても生活できない多くの人びとやさまざまな困難<sup>かた</sup>を抱えて苦悩の中で生きる人びととともに、この混迷する現実<sup>まぎ</sup>に深く眼をこらして見つめ、あらためて浄土真宗の教法<sup>きやうぽう</sup>に学び、思索し、「欲望充足型の幸<sup>しきく</sup>

福感」「自己の思いの通りになる」人生観から脱却したいものである。そして、阿弥陀如来の智慧と慈悲とに照らされて、御同朋御同行と呼びかけ、支えあって歩むところに私たちの有りようを見出したい。

即如門主は御消息の中で、

今日では、人間中心の考えがいよいよ強まり、一部の人の利益追求が極端なまでに拡大され、世界的な格差を生じ、人類のみならず、さまざまな生物の存続が危うくなっています。

と現状を率直に述べられ、

如来の智慧によって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることができる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思います。

と述べられている。

親鸞聖人は、『浄土和讃』「冠頭讃」（『浄土真宗聖典』註釈版、五五五頁）で、

弥陀の名号となへつつ  
信心まことにうるひとは  
憶念の心つねにして  
仏恩報ずるおもひあり

と詠われ、『正像末和讃』「三時讃」（註釈版、六〇六頁）で、

如来の作願をたづぬれば  
苦悩の有情をすてずして  
回向を首としたまひて  
大悲心をば成就せり

と詠われている。

私たちは、かつて宗門に集った多くの先人たちが現実の厳しさ、困難さに向きあい、浄土真宗の教法を継承してこられた長きにわたる歴史に学ぶことが大切である。私たちは二年後に親鸞聖人七百五十回大遠忌法要をお迎えする課題を明確にして、教法の興隆に努めることに、無量のいのち生かされた者の責務をすえたいものである。

（本願寺史料研究所所長）